人間らしく生きたい

——郡上一揆(ぐじょういつき)をめぐって——

岸 武雄・作　　小林与志・絵

人間らしく生きたい

——郡上一揆（ぐじょういっき）をめぐって——

岸 武雄・作　　小林与志・絵

图书馆
章

武雄

一九一二年岐阜県に生まれ、五十年余、教職に従事。一九五九年「岐阜児童文学研究会」をつくり、一九七二年『コボたち』をなかまとともに創刊。『千本松原』で野間児童文芸推奨作品賞、『花ぶさとうげ』で小学館文学賞を受賞。

小林与志

一九二五年東京に生まれる。デザイン工房の仕事をへて、一九六〇年ころよりさし絵の仕事をはじめる。『おじいさんのランプ』『ごんぎつね』『おじさんのへんなイス』等、多くの作品をてがける。

人間らしく生きたい ―郡上一揆をめぐって―　こみね創作児童文学・23

1990年7月30日　第1刷発行

著者／岸　武雄　　画家／小林与志

発行者／小峰紀雄

発行所／㈱小峰書店　東京都新宿区市谷台町4-11

☎03-357-3521　振替・東京6-195544

表紙印刷／斎藤印刷所

本文印刷／厚徳社　製本／小高製本工業

NDC913　ISBN4-338-05723-8

©1990 Printed in Japan

人間らしく生きたい／もくじ

もくじ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一章　獄門首が失えた……5
二章　弥助、足がすくむ……81
三章　であいと別れ……157

装幀・挿画／小林与志

一章

獄門首(ごくもんくび)が失(うしな)えた

一、三つの首桶

濃尾平野の冬は、寒さがことに身にこたえる。いわゆる「伊吹おろし」が、はげしい西北風となって、平野いっぱい吹き荒れるからだ。とくに、年の暮れから正月にかけては、小雪まじりの冷たい風が、耳もとに布を引きさくような音をたてて、走りぬける日が多かった。

宝暦九年（一七五九年）一月十四日のことである。

美濃の国笠松陣屋の代官代理江川重助は、江戸から早駕籠が着いたとの知らせを聞き、あわてて陣屋のざしきから縁に出た。とたんに、おりからの吹雪をまともに受け、思わず顔をしかめた。

縁には、みのかさすがたのひとりのさむらいが、かたひざついてうずくまっている。

「おお、朝からおぬしを待っておったぞ。江戸からはるばるご苦労じゃったのう」

江川重助は、まずねぎらいのことばをかけた。

江戸からの使者の取扱いなどは、本来なら代官が自ら行なう大事な仕事であった。ところが、笠松の代官青木次郎九郎は、年の暮れに江戸で行なわれた評定所の裁断によって、職を止めさせられたばかりであった。

評定所の裁断は、もとよりおかみにはむかった百姓たちにもっともきびしかったが、喧嘩両成敗というわけか、郡上藩もお取りつぶしになり、また幕府の出先機関として藩を監督する立場にあった笠松の代官も、責任をまぬがれることはできなかったらしい。したがって、用人の江川重助が、とりあえず代官の職を代行していたのである。

縁にうずくまるさむらいも、このへんの事情はわかっていたのであろう、ていねいなことばで答えた。

「おそれ入ります。わたくしは、このたびの獄門宰領の役をいいつけられた伊奈半左衛門の家来、高山久右衛門と申します。ただ今、むほんにんどもの首を、江戸から持ってまいりました」

江川重助を見上げる顔は、何日も早駕籠にゆられつづけ、げっそりやつれていたが、細い二つの目だけは、熱におかされたように光っている。

「うむ、さぞ難儀なことであったろう。……して、首桶はどこじゃ？」

「ははっ。……おい、早くそれをこれへ！」

久右衛門はふりむいて供の者に声をかけると、ふたりの男が進み出て、地べたにおいてあった三つの桶を、雪で白くなった縁の上にならべた。桶は、どれも赤茶色の油紙で包んであり、その上に、筆太に書いた美濃紙が張りつけてある。

獄門首　前谷村　定次郎

獄門首　寒水村　由蔵

獄門首　歩岐嶋村　四郎左衛門

「このたびの百姓一揆の頭領どもの首じゃな？」

「はい。おかみをおそれぬふとどき者たちの首でございます。……では、さっそくあらためていただきましょうか？」

「うむ！」

江川重助は、みけんにしわをよせ、うなるようにいう。

久右衛門は、まず定次郎の首桶に手をかけた。

油紙の中はこもで包んであり、そのなわをとくと、ま新しい桶があらわれた。久右衛門はひと息ついたあと、さっとふたをあけた。

桶の中には塩がつめてあり、それを透かしてかすかにかみの毛が見えた。

百姓たちの処罰は、評定所の裁断の下ったすぐあと、つまり暮れの二十六日にいっせいに行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なわれた。しかし、この三人の首だけはそのまま塩漬けにして、江戸から美濃の国まで百三十里（約四百二十キロメートル）の道のりを、わざわざ運んで来たのである。一揆の中心地郡上八幡において、百姓たちの見せしめのため、三日間「さらし首」にするためであった。

定次郎は、三人のうちではいちばん年が若くて、三十一歳。かみの毛のくろぐろしているのが、いっそう首をなまなましく見せた。久右衛門が、さらに首を外に引きだそうとすると、

「もうよい！　首あらためは、すべて終わったことにする」

と、江川重助はおこったようにさけび、首桶から目をそむけた。

「はっ！」

久右衛門もさすがにほっとしたように、桶をもとどおり包みはじめた。

人間のなま首を見るほど、強い衝撃を受けることはない。ふたりの間には、なんともいいようのない張りつめた沈黙がつづく。

代官代理の江川重助は、このたびの百姓一揆のかくれた首領といわれた定次郎のうわさは、むろん前から聞いていた。しかし、顔を会わせたことは一度もなかった。

あれはたしか今から三年ほど前、宝暦五年十一月のことであった。

そのころ、江川重助は江戸で評定所の下役人をしていたが、美濃の国の百姓五人が、ことも

あろうに、老中酒井左衛門慰忠寄の登城する行列の中へとびこみ、いわゆる「駕籠訴」を行なったと聞いた。もとより、こんなことは固く禁じられているが、百姓たちは、死を覚悟して決行したにちがいなかった。

おどろいた江川は、酒井のとのさまのところへ、お見舞いにかけつけた。とのさまとは、評定所の仕事の関係から、いろいろとさしずを受けていたからである。

「おお、江川か。はやばやと、よう来てくれたな」

その日のとのさまは機嫌がよく、

「これは百姓の願い書じゃ。おまえものちのちの参考のため、見ておけ」

と、一通の書状をぽいとほってよこした。

「ははっ、有難うございます」

江川は、むねをわくわくさせて書状を開いた。かなり長い文章でくわしく書かれていたが、今のことばで要点をまとめてみると、だいたいつぎのようであった。

郡上というところは、高い山が四方にそびえ野獣などの被害も多く、また気候も寒くて米も思うように取れなくて、百姓たちは暮らしに困っておりました。

ところが、お年貢は年々重くなり、とくに来年からは検見取（田畑の広さをはかり直

し、またその年のでき高に応じて、今までより多く税を取るやり方）にするとおうせ出されました。百姓どもはびっくりぎょうてん、それではとても生きていけませぬと、お年貢をもとどおりにしていただくよう、みんな必死の思いでお願いしました。幸いにも国家老はお聞きとどけ下され、「江戸にいる金森のとのさまにそのむね申し上げ、なんとかするから」との書きつけまで下されました。

わたくしどもは、ほっと安心しておりましたところ、このごろになって、「やはり藩の方針は変えられないから従え」といわれます。「それでは約束がちがいます」と申し上げますと、その者はとらえられ牢屋へ入れられてしまうありさま。万策尽きたわたくしどもは、このうえはおかみのお慈悲にすがるよりないと考え、代表五人がいのちがけでお行列をけがしたわけでございます。ご無礼のことは深くおわびいたしますが、何とぞ百姓どもの心をお聞きとどけ下さいますよう、伏してお願い申し上げます。

読んでいると、百姓たちの必死の気持ちが、せつせつと伝わってくる。江川重助は、美濃の国の郡上の騒動については、前々からうわさは聞いていたので、それほどおどろかなかった。が、文章の書きぶりのみごとさ、文字の達筆な点について、目を見張った。この書き手は、よほど学問もありしっかりとした人物らしく、とてもただの百姓とは思えない。

「いったい、この願い書は、だれが書いたのでございましょうか？」
と、思わず酒井のとのさまにたずねた。
「うむ。あまりにみごとな文章や筆跡なので、わしも、その方面にくわしい者にたずねてみた。それによると、書面には郡上の百姓の代表として、歩岐嶋村の四郎左衛門の名が見えるが、実際は前谷村の定次郎という男が書いたらしい。こんな気迫のこもった文章や文字の書ける百姓は、ほかにはないとの話じゃ。しかも、年はまだ二十七、八歳とか聞いておるが……」
「へえー、そんな若さで……。百姓の中にもたいした男がおるものでございますなあ。もっとも、駕籠訴などするとはけしからぬやつですが……」
江川重助は感嘆して何度もその願い書を読み返したのであった。
――定次郎という男に一度会ってみたい。
と、ひそかに思ったこともあったが、数年後の今、まさか首桶の中の彼と会おうとは……。

ふいに吹雪が地面から噴きでるように舞い上がり、あたりをまっ白に包んだ。やがて吹雪が少しおさまると、代官代理江川重助は、ともすれば思い出にふけりがちな自分自身をしかるように、いちだんと声を張り上げた。
「ええか、久右衛門！　おぬしの主人伊奈半左衛門どのは、このたびの獄門宰領として、すで

に郡上八幡に行っておられる。おぬしの到着を、首を長うして待っておられるのじゃ。今宵はここでゆるりと休み、あすの朝出発、あさっての夕刻までには、八幡に着かねばならぬ。

しかし、駕籠で走ることはゆるされんぞ。必要な道具や人足はこの代官所で用意するゆえ、おぬしは行列をつくり首桶をまもって、堂々と北上するのじゃ。

沿道はみな敵地、どんな目をして百姓たちが迎えるか、わかっておるだろうな！　おかみのご威光をしめすよう、しっかりたのむぞ！　獄門になさけようしゃは、いっさい無用じゃ。万一、行列をさまたげる者があれば、かまわん、そくざに斬って捨てい！」

「ははっ、かしこまってございます」

久右衛門は、吹雪で白くなった庭に、カニのようにかたを張って平伏した。

二、獄門首の使者

あくる朝、高山久右衛門の一行は、獄門にかける三つの首をまもって、笠松の代官所を出発した。

まず、馬に乗った久右衛門を先頭に、ぬき身の長い槍をかついださむらい四人がつづいた。そのあとから、六人の人足が首桶三つを棒につるして運んだ。さらにそのうしろには、三人の捕手役人が、「さすまた」「突く棒」「からみ手」など、罪人逮捕に使う見るからにおそろしい「三つ道具」を持って歩いた。馬の口をとり道案内する代官所の役人を入れて合計十五人。わずか三つの首を運ぶには、まことにぎょうぎょうしい行列であった。

さいわいきのうまでの吹雪もおさまり、けさはときどき青空まで見えるよい日和であった。おりからの朝日に、ぬき身の槍の穂先もまぶしく光って、この異様な行列は、たちまち沿道の人々の目をひきつけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com